

静岡大学地域連携プログラム「想いや願いを筆に込めて」：その成果と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉崎, 哲子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007093">https://doi.org/10.14945/00007093</a>

## 論文

# 静岡大学地域連携プログラム「想いや願いを筆に込めて」 ——その成果と課題——

杉崎 哲子\*

## はじめに

地域に開かれた大学、静岡大学の書写書道教育を任されている者として、本学の学生が大学での学びを生かして地域貢献できる場の設定が重要であると考えている。そこで本学に着任した平成23年度には、書文化専攻生全員が関わる形で南部生涯学習センターとの共催講座「筆で書く年賀状」を実施した<sup>(1)</sup>。平成24年度は更に内容を充実させるべく、静岡大学地域連携プログラムとして静岡市美術館と連携を図り、館の企画展「近江巡礼 祈りの至宝展」のワークショップ「しずび書き初め大会」を平成25年1月2日と3日に実施し、1月11日から14日にかけては書展「想いや願いを筆に込めて」を開催した。

ここでは、本プログラムの内容について報告し、その成果と課題を明らかにする。

## 1 本プログラムの出発点

静岡大学の書道教員が中心となって書文化の振興を図る目的で結成された「静岡県大学書道学会」は、前任教員が着任して間もなくの昭和54年から昨年度までの長きに渡り、地域社会において市民参加型の書き初めや書道展を展開してきた。開始から22年間は市街地のデパートを会場にした「書き初め席書大会」であったが、途中で会場確保が困難になり中断するも、平成15年には静岡市文化振興財団の助成を受けて公募展の形で再開することができた。この時期より静岡大学の非常勤講師であった筆者も事業に関わり、殊に平成17年度から平成22年度までの視聴覚センター（マビック）との5カ年間の共催事業「マビック書道展」では、研究と書展とを併せて実施するなか研究部の責任者として企画・実践に携った<sup>(2)</sup>。その後の1年、つまり昨年度は継続できたが、視聴覚センターの閉館に伴って中止せざるを得なくなった。

ただ上記の一連の事業は、いずれも筆者ら非常勤講師やその他の卒業生が中心となって企画立案したものであり、筆者も研究部の責任者でありながら、人文学部の非常勤であったために静大書文化の在学生との接点が少なく、手探り状態で彼らの学びを生かせるまでに至らなかった。

そこで、自治体との連携を図って専門職の方の教えを受けつつ、大学生が大学での学びを生かした形で地域貢献する場を設定したいと考え市役所へと相談を持ちかけたところ、静岡市文化振興財団の方から静岡市美術館の「書き初め大会」の取り組みを紹介された。静岡市美術館では、ワークショップの内容によって必要に応じ学生ボランティアを募集している。したがって、単なるボランティアならば各自がそれに応募すれば十分である。しかし今回は静岡大学の地域連携プログラムとして、書文化専攻生の学びを生かした関わりが可能となった。この形の連携について美術館側からも合意が得られ、本プログラムが開始されることとなった。

## 2 実施の経緯

### ・連携要請（平成23年12月）

…市役所に出向く。そこから静岡市文化振興財団へ、さらに静岡市美術館へと連携の趣旨を伝える。

\* 静岡大学教育学部講師

- ・打ち合わせ、書文化ガイダンス（平成24年4月）  
…打ち合わせの内容を受け、書文化の年間予定に組み込む形で学生に本プログラムについて通達する。
- ・決定事項の確認、打ち合わせ（平成24年7月、8月）  
〔「近江巡礼 祈りの至宝展」関連イベントとして静岡市美術館で「しずび書き初め大会」を実施する。  
〔「想いや願いを筆に込めて」静岡大学書文化卒業書展・学生書展の特別企画書展への出品協力を依頼する。〕
- ・書き初め大会の内容検討、打ち合わせ（平成24年8月）  
…「広報静岡」（11月掲載の原稿締め切り/9月）に合わせて「書き初め大会」の内容を検討する。  
〔年頭にあたり、祈りや願いの語句を、想いを込めて大きく書く。完成作品は静大書文化卒業・学生書展に出品。（希望者のみ）\*作品の受渡しは静大でとりまとめる。以降はメールで確認する。〕

日時	家族編：1月2日（水）14:00～16:00 個人編：1月3日（木）14:00～16:00 * 10時～12時まではフリー書き初め
会場	静岡市美術館 多目的室
参加者	家族編：8組32名、個人編：17名
参加者持ち物	自身で使いやすい書道用具があれば持参可。基本的に筆・墨（墨汁）・硯（灰皿で代用）・紙（全紙、静岡サイズ、半切など）は美術館・大学で準備する。

- ・スケジュール調整、打ち合わせ（平成24年11月）
- ・準備（平成24年12月26日）多目的室養生準備 静大学生5名+美術館2名 ⇒ビニールシートをしく。  
〔前日までの作業（美術館）…報道なげこみ、アンケートの作成、看板等の作成  
〃（大学）…パワーポイント、配布資料、用具・用材、パフォーマンス（含音楽）等準備〕

《当日の流れ》

1月2日（水）		対象：10組（家族）			
時間	全体の流れ	来場者	書文化	職員	備考
12:00	莫タワ集合 ミーティング+設営	見学	受付設営	職員	・来場者用の名札作成 ⇒プロジェクターの用意
13:00	書道パフォーマンス		会場設営		
			パフォーマンス 書文化は専用の名札を用意		
13:30	受付開始	受付を済ませて会場内へ	来場者誘導	受付係	・受付で関係資料等を配布
14:00	開始 関係者挨拶	開始 話・スライドショーを聴く	撮影係	司会 ↓	
14:10	スライドショー 書文化紹介 5書体の説明（楷・行・草・篆・隸） 書き初めの由来 本事業の説明	↓	司会 ↓		・プロジェクターを使用 ・部屋を暗くする
14:15			パフォーマンス		・皆の前で書体を披露
14:30	スライドショー終了 書き初め開始	書き初め開始（個々で実践） 文字（書体含め）決定 紙サイズ決定 作品作成	会場準備 各グループに書文化生配置【5】 作品作成補助	プロジェクター 片付け	・プロジェクターは以降使用しない ・書き初め開始次第各々で行動 ・一人何枚書いても良い
15:30	書き初め終了	作品完成	会場片付け（簡単に）		・作品発表が可能なスペースを確保
15:40	発表会 記念撮影	完成作品の発表 前に出るor輪になって作品名・作品に込めた想いを全員が発表する	司会、記念撮影		・1組ずつ発表
15:55	関係者挨拶			司会	
16:00	終了	帰宅	会場片付け+明日の準備		・お疲れ様でした

1月3日(木)		対象：20名(個人)			
時間	全体の流れ	来場者	書文化	職員	備考
9:30	莫タワー集合 ミーティング+設営			会場設営	
10:00	自由参加型書道体験 開始	好きな字を書き初めする	近江巡礼の祈りの至宝 展ご来場者に参加を呼 び掛ける		・完成した作品は各自持ち 帰ってもらう
13:00	自由参加型書道体験 終了				
	書道パフォーマンス	見学	※1日目と同様	※1日目と同様	
13:30	受付開始	受付を済ませて会場内へ			
14:00	開始 1日目と同様の流れ	開始			
16:00	終了	終了		片付け開始	
～18:00	完全撤去 終了			完全撤去	お疲れ様でした

### 3 「しずび書き初め大会」の様子

《1月2日》 8家族、32名応募（当日参加者 6家族 28名）

ほぼ定刻通りにパフォーマンスを開始したものの、車での来場者が駐車するまでに時間を要して足並みがそろわず観客が少なかった。また、書いた紙を持ち上げて見せる際に墨が垂れることを懸念し、余分な墨を紙で押さえ取るようにしたところ、その所作が雑然とした感じを生んでしまった。時間もあったので、書き初め大会開始の前に、急遽もう一度パフォーマンスを行ったところ、沢山の方に見ていただけた。

書き初め大会では、最初に美術館の方から「しずび書き初め大会」の趣旨に関する説明があり、その後はスライドを使って書文化の紹介をし、五書体の説明、書き初めの由来や題材の候補に挙げた語句についての話という流れで進めた。特に「近江巡礼 祈りの至宝展」にある「楽山楽水図」については、それに関する論語「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しみ…」の説明も加えた。

「知者楽水」「仁者乐山」、その他の語句（温故知新、一意専心）については、各家族で題材を相談する手だてにと考え、それらを五書体で示した資料を配布した。

学芸員の案内で実際に「楽山楽水図」を鑑賞して書かれた家族、隔年で日本に帰省するスペイン在住の娘夫婦と孫、娘らのために応募したという年配の夫婦という三世代家族など、どの参加家族も書く語句や書体、誰がどこを担当するかを話し合い、見守りながら「寄り合い書き」の楽しさを満喫された。



写真1 学生による書道パフォーマンス



写真2 スライドショー



写真3 集合写真



写真4 書き初めの様子

《1月3日》 17名応募（当日参加者 18名）

前日の反省を生かし、パフォーマンスから書き初め大会終了までの学生各自の動きを確認して臨んだため、スムーズに進めることができた。参加者はそれぞれ意欲的に取り組み、限られた時間ではあるが、幾枚か書き込み納得のいく作品に仕上げている。年配の方の多くが色々な書体や語句にチャレンジしているのに対して、小学生の幾人かに書塾での課題を、そこでの手本を脇において書く姿が見受けられた。自信を持って書ける題材でない取り組み難しいのか、小・中学校で取り組む書き初めが作品の出来映えを求めてきたことの影響なのか、自分の想いを書くという「書く」楽しさを伝えるまでには至っていないと考えられる。



写真5 配布資料部分



写真6 集合写真



写真7 作品発表

#### 4 企画展「想いや願いを筆に込めて」展示風景

作品展示については、書き初め終了後にしか出品点数や大きさを把握できないため時間的に余裕がなく、裏打ちや積文票の準備、展示レイアウトなどの一連の作業を急ピッチで行った。そのせいもあって会場案内図や看板の準備が不足したなどの反省点は多いものの、卒展・学生展作品の展示部分を調整して十分なスペースを確保でき、全ての作品が生き生きと来場者に語りかけるよう配置した。そこに書き初め大会の様子を写した写真も一緒に展示した。来場者からは、楽しい書き初め大会の様子が伝わってきた、家族で書きあげた作品から温かい想いが伝わってきたという感想が寄せられた。

参加者の方からは、「卒展・学生展と併催であったため静大書文化の学生が本格的に書を学んでいることを知ることができ、余計に関わりをもてたことを嬉しく思った。」との言葉をいただいた。また、81歳の記念にと書き初め大会に参加された男性からは、「私にとって新年早々、何よりなお年玉」というお礼の封書が届いた。そこには、書き初め大会での制作の喜びだけでなく、支援や作品の裏打ち、展示、パフォーマンスなど関わりのそれぞれに対する心温まる言葉と、2日に渡って書展に来場し存分に書の鑑賞を楽しまれた旨も記されていた。作品返却の後にも重ねてお礼の葉書が届き、大いに学生の励みとなった。



## 5 アンケート結果、感想、反省

### 《参加者より》

#### ○イベントの情報源／

- ①関係者から聞いて ②ポスター・チラシ ③広報静岡、静岡大学のチラシ 他

#### ○参加理由／

- ・お正月に家族での書き初めは素敵だと思った。
  - ・日本の伝統文化に親しむため。
  - ・大きな紙に書いてみたかった。
  - ・パフォーマンスを見て参加したくなった。
  - ・書の素晴らしさを体験したかった。
  - ・自分への記念として参加した。
- 他

#### ○感想／

- ・年の初めに書くことの楽しさを味わえてよかった。今後も是非参加したい。（多数）
  - ・大学生、美術館の方の支援が行き届いていて有難かった。（多数）
  - ・道具など用意してくれて有難かった。
  - ・大きく書くのは難しかったけど楽しかった。
  - ・もっと書きたかった。
  - ・パフォーマンスが良かった。
- 他

### 《静岡市美術館より》

- ・当日取材が思った以上にあり、新年より開館していること、近江展の開幕告知にもつながった。
- ・大学と美術館の連携ができた。
- ・業務の執行方法に難があった。
- ・大学との連絡がうまくいかず、イベント内容を練る時間が不足。結果的に事業の質がよくなかった。

### 《書文化学生より》

- ・参加者の方に喜んでもらえて嬉しかった。書の楽しさを再認した。
- ・広報掲載文やチラシ、配布資料の内容を参加者の立場になって検討するということの重要性を学んだ。
- ・計画的に進めることができず、美術館側との内容検討の時間が不足していた。
- ・3日には改善できたが、事前にシミュレーションをしっかりとすべきだった。
- ・展示については反省点が多い。時間的に厳しいことが予測できたにも関わらず準備が不足していた。
- ・写真の展示に関しては、事前に承諾の可否を把握しておくべきだった。

## 6 本プログラムの成果と課題

このプログラムを通して見えてきた成果と課題のうち、最初に「しずび書き初め大会」と企画展「想いや願いを筆に込めて」の内容に関して述べ、それをふまえて連携について振り返る。

### (1) プログラムの内容に関して

よくある「書き初め大会」のように成果物である作品に優劣をつけるのではなく、書くこと自体を楽しんでもらう方向で実施したいという美術館側の考え方に賛同して本プログラムをスタートした。

#### ①「書き初め」に対する思いと美術館企画展との関連について

静岡市美術館では、「家康と慶喜－徳川家と静岡展」の関連イベントとして平成23年1月2日と3日の両日に「家康・慶喜・家達に挑戦！書き初め大会」を実施している。初日には祖父母・親・子の三世代で、徳川慶喜・家達・慶久・家正の4人が「寄り合い書き」した書「和楽且湛」にチャレンジするという形で実施し、個人の部では、慶喜が七歳の時に書いた「楽山」や家康の「誠」を展示室で鑑賞した後に、時代を超え世代を超えて我々の心を捉える作品の力を感じながら書くというように、美術館の展示と絡めた「書き初め」を行っている。

そこで、今回も「近江巡礼 祈りの至宝展」と絡めた実施をと考え、書文化の方で美術館の展示品リストをもとに検討していた。その中で、最初注目していたのは墨の潤濁の効いた墨蹟である。それを参考に、家族で淡墨と濃墨とをコラボさせた作品制作を考えたり写経を参考にした細字作品を書いたりしてはどうかという企画を練っていた。しかし、その墨蹟は巡回されないこととなり、また細字はイベントとしてよりも講座としてじっくり取り組むべきであろうということになった。そこで「祈り」に絡め新年の

抱負を書きとめる「書き初め」の意義を含めて、「想いや願いを筆に込めて」というテーマにまとまった。また美術館からの提案を受けて、パワーポイントを使用した「書き初め」の説明の中に、昨年度に美術館で開催した歌川国芳展の国芳作品の寺子屋の場面も加えることとなり、内容的に充実させることができた。

## ②「寄り合い書き」について

書作品で重要視されるのが気脈の貫通である。気脈とは線と線の気持ちのつながりであり、実際にはつながっていない場合も、一字から数字を一筆で書き、「つながり」を大事にして筆を運ぶ。一般的には、一人が書き始めから書き終わりまでの呼吸を途切れさせず、その間の時の流れを大切にしながら空間美を追求することになる。したがって、最初は複数人で書く場合の気脈の途切れを懸念した。しかし、この形式を家族で「気脈」を共有し呼吸を合わせる、家族で気脈をつなぐ（リレーする）と解釈すればよく、「三世代」や「家族」での参加は、むしろ「寄り合い書き」の特徴が際立ち、その意義が認められる。

実際、小さい子が「一」の一面を集中し気持ちを込めて書き、その後に親が「意」と続けて書いた家族、難しい「楽」の字に挑戦している子供を見守る父母の姿が見られるなど、家族で一作品を書き上げる活動は、実に温かく楽しいものとなった。近江巡礼の写真パネルに囲まれて制作できたことも意義深かった。

## ③題材設定について

想いや願いを表現する書制作においては、まず題材設定が重要であり、それを決定することも書制作の楽しみの一つである。特に今回は「想いや願い」がテーマであるため、書文化では出来るだけ参加者の希望を優先したいとの思いから字書や配布資料での対応を考えていた。しかし美術館側からの指摘通り、時間的制約と参加者からの「何を書くのか」という質問に対する回答の必要性が生じ、家族編、個人編とも語句を3つずつに絞って提示した。それぞれの語句について五書体を並べた資料を配布したことによって、語句を限定しつつも字面を考えた書体の選択を楽しめたようである。

さらに資料を作成する大詰めの時期ではあったが、美術館から指示が入り、幸いにも「楽山楽水図」の鑑賞と、それに関する論語の通りの「知者楽水」「仁者乐山」も題材例に挙げることができた。書体の変遷や論語、その他の語句（温故知新、一意専心）についての解説も組み入れ充実した内容のパワーポイントを示せたと考えている。パワーポイントは、画像の展示が可能で、要点を押さえた口頭説明に役立つ。特に時間的制約のある場合、無理なく進められるよう制作の手順も示せるので有効である。

## ④パフォーマンスと席書について

パフォーマンスは現代の風潮のようにとらえられがちだが、実は、書家による書道パフォーマンス自体は江戸時代以来の席書の伝統の延長上に位置づけられている。江戸時代から明治時代中頃にかけて盛んに行われた書画の催しの一つである書画会では、個人が寺院や料亭の座敷を借りて席書を開催していた。

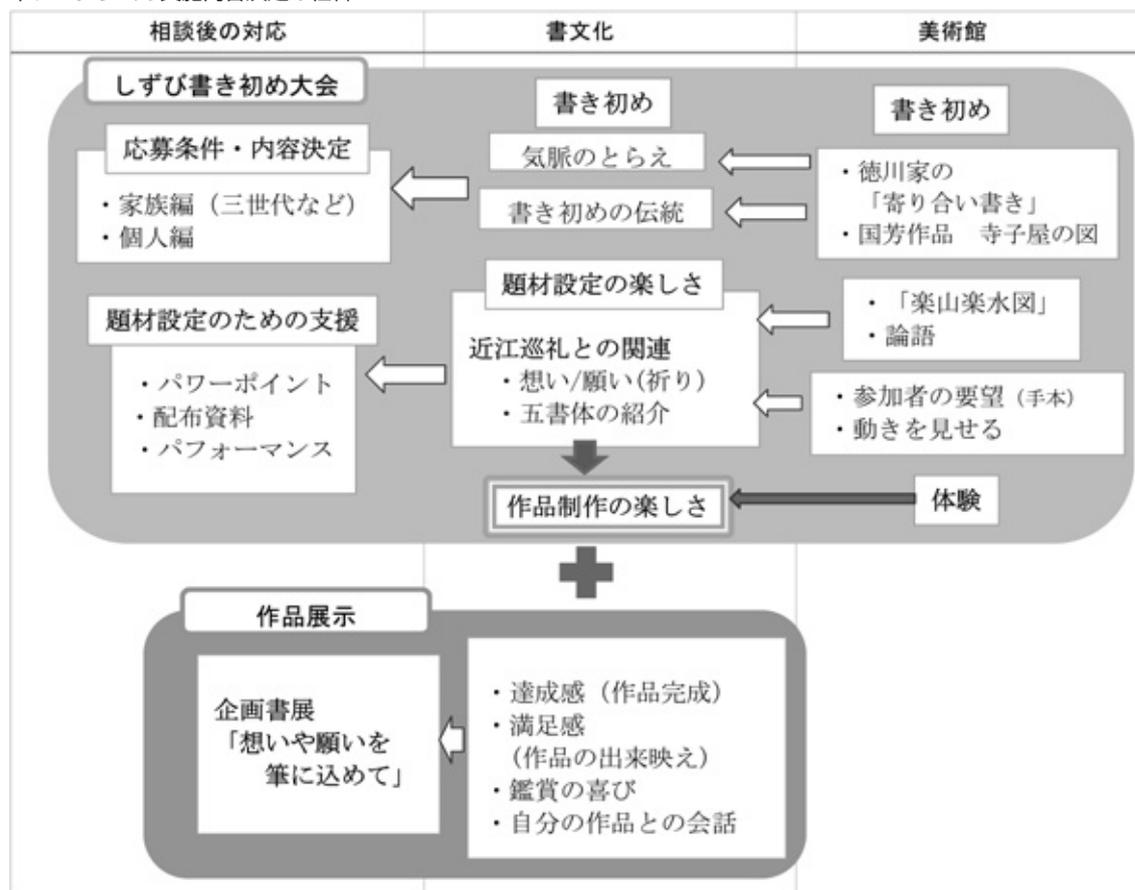
また、手習いの師匠が門弟や他の人々を集めて席上で揮毫させ、書かれたものを展覧する催しも席書と呼ばれていた。江戸時代の席書は、日頃の練習の成果を公衆に示す目的で実施され、寺子屋の師匠もまた、その指導の技量と手腕を社会に示す機会にしていたようである。その際に大太鼓による伴奏が行われていた記録もあることから、現代の音楽に合わせて書く「書道パフォーマンス」は、寺子屋における席書の大字揮毫が進化・発展したものであるといえる<sup>(3)</sup>。

本プログラムにおける「書き初め大会」開始前のパフォーマンスは、あくまでも書文化専攻の紹介と導入という意図で、会場の広さに合わせて内容を決定した。美術館側から、今回は徳川展の時のような「手本」がないので「書く過程を見せる」という意味でパフォーマンスの実施を提案され学生に話したところ、最初、彼女たちは、最近流行っている派手な「書道パフォーマンス」をイメージしていた。しかし館内の雰囲気に合わせて、静かな曲で落ち着いた感じの構成を考えた。「書き初め大会」の中でも書文化の学生が実際に「水」を五書体で揮毫したので、大字書きの際の筆の運び方も示すことができ有効であったと考える。

## ⑤作品制作の楽しみについて

毛筆で書く行為自体楽しいものだが、大字となれば尚更貴重な体験となり書きあげた達成感は大きいものである。作品の出来映えも気になり、上手く書けると満足度が増大する。そこで題材設定の段階では見

本プログラムの実施内容決定の経緯



栄えのする字面の語句を選択した。その点で干支の「巳」を書くという案は採用できず、書写的な文字では表現効果が出にくいということと、出来映えの比較が起こらないよう参加者のなかで書く文字の重なりを少なくすることへの配慮も込めて、資料に五書体を掲載することにした。

また「作品」を展示するという目標があると、それが動機づけとなって制作意欲が向上する<sup>(4)</sup>。しかも、書く語句が自分の想いや願いであった場合は、それこそが表現することの楽しさに直結する。逆に同じ語句で書かれた作品を並べて展示する場合には、劣等感を味わう者がでるといふ弊害が指摘されている<sup>(5)</sup>。そこで、過去に行った「マビック展」では、書く題材を、例えば「静岡の魅力(自然)」などのテーマに合わせて自由に決められるように配慮した<sup>(6)</sup>。今回提示した語句は3種類ほどではあるが、書体選択に幅を持たせ他に書きたい語句を書くことの自由を保障したため、参加者の意思を反映できたと考えられる。

さらに書展の開催によって、作品鑑賞の楽しみが加えられた。書制作をしていると、作品を書き終えた瞬間、それが自らの手を離れて独り立ちするように感じることもある。他の人の作品を鑑賞することはもちろんだが、書展において自分の作品と再会し対話することも楽しいものである。

以上の5つの視点から、本プログラムは地域の文化振興に大いに貢献できたと考える。

(2) 連携に関して

書文化専攻生の地域への関わりとして、「書き初め大会」への協力を申し出たが、静岡市美術館では書き初め成果物の展示はしないため、作品制作と合わせて成果発表も行うことにした。時期的にも卒業書展・学生展のために確保したグランシップにおける併催が可能であった。

書文化専攻生による企画では、専門的に書を学んでいることが支援としてプラスに働く反面、逆に一般の参加者の視点とのズレが生じる場合もある。今回、静岡市美術館と連携を図ることによって、対象をどうするか、時間配分はどうかなどの大枠だけでなく、チラシなどへの分かり易い表記に関しても、参加者

の気持ちを代弁するような「何を書くのか知りたいだろう」「課題を絞って提示した方がよい」といった様々な配慮をするうえで、とても参考になった。広報への記載文やチラシ・ポスターの作成など、一般市民に参加を求める場合に考えるべき様々な事項について、ワークショップ実施の経験に基づくプロの目線での指摘が加えられ、学生は、その都度教わりながら進めることができていた。

また参加費に関しては、既に美術館に揃っている下敷きや墨池代わりの灰皿、文鎮などの用具を使用し、紙や墨は静岡大学のプログラムの予算から捻出し、参加者からは徴収しないということで進めた。ただし、出品作品の返却のための宅急便代は、イノベーション社会連携推進機構の阿部耕也先生から提案いただいた通り、着払い伝票を本人に書いてもらって対応した。出品が希望者に限られていることと配送先の住所の記録を避けるという個人情報管理の意味からも賢明な判断であったと考える。

広報活動に関しては、市の美術館ならば新聞やテレビなどでの宣伝効果が大きいと目論んでいたのだが、それは展覧会自体であり、関連イベントは館内や市の施設にチラシを置くといった対応に留まった。「書き初め大会」の参加者募集については、まず「広報静岡」に、続いて静岡大学とイノベーション社会連携推進機構(地域連携生涯学習部門)のHPにも掲載してもらったが、実際にはなかなか参加者が集まらなかった。そこで静岡大学教育学部附属静岡小学校の全生徒に、また筆者が担当した書道大学講座や静岡県書道振興会の会合の席でもチラシを配布したところ、ほぼ定員を満たす応募となった。

書展の広報については、例年卒展で葉書を送付しているため、それを継続したが、むしろ回覧板を活用したり公民館にチラシを置いたりするなど、近隣住民への働きかけが必要であると感じた。

## 7 今後の方向性

本プログラムは、「書き初め」という伝統文化の継承と表現活動としての書制作のあり方の拡大という点で開催の意義が認められた。ここでは、静岡大学地域連携プログラムとしてのさらなる充実を図るため、今後の方向性について考察する。

### (1) 日常に生きる書写指導の確立と表現の喜び体感

書塾の指導者から受け取ったであろう、いわゆる手本をもとにして書いていた小学生は、書写の授業で取り扱われた教材文字を他の文字に応用発展するまでには学習が定着していなかったと察せられる。書写教育に従事する者として、日常に生きてはたらく書写指導の推進に対する一層の努力を自覚している。

また今回は、時間的な制約を克服するよう題材設定に工夫を凝らし書体や用紙の選択を交えることによって、参加者に自らの表現活動として書制作を楽しんでもらうことができた。パフォーマンスによって書く過程を示したことも表現意欲の喚起に有効であったと考えている。基礎・基本を学ぶ小・中学校の「書写」を大事にしながらも、高等学校芸術科書道への関連や生涯書道への発展を考えて、発達段階に対応した形で文字を書くことの楽しさを伝える<sup>(7)</sup>ことは、生涯にわたって書を愛する心を育成していくことに結びついている。殊に、幅広い年齢層を対象にする場合には、参加者の発達段階や個々の想いを尊重して書く活動を展開していくことが重要である。

### (2) 家族や地域の「伝統文化継承」教育機能の再生

「書き初め」そのものが伝統文化の継承に値するが、1日目の家族編という形態についても、かつて「書き初め」が年中行事の一つとして家族内で行われていたことと関連づけられる。地域生活の基本単位としての家族とは、「生命維持のための基本的な生活習慣を身につけさせること」や「社会生活を営むための躰」などの重要な教育機能を持っているが、加えて「伝統文化の継承」の役割も果たしていた<sup>(8)</sup>のである。

また、スライドや配布資料を活用して書き初めの由来や論語の意味などを示したことも、書や伝統的な言語文化に対する知識・理解の促進につながった。教育環境として地域社会を考えた場合、国際社会における日本人としての資質形成<sup>(9)</sup>が重要な役割の一つに挙げられる。書に限ったことではないが、国際人としての交流を推進するためには、知識・理解に裏付けられた技能の向上が求められる。これは学校教育の

みならず生涯学習という視点において、今後ますます力を入れて取り組むべき課題であり、地域に根差した本学教育学部の書文化教室は、その主軸となれるように努力する必要がある。

### (3) 継続実施への努力とネットワークの強化

事業の内容を向上させるためにはPDCAサイクルの手法を十分に活用する必要がある。しかし、継続的に実施できない場合、KGI（Key Goal Indicator）の確認に終わってしまうのはやむを得ないことである。実は昨年度の「年賀状講座」の際、2回の講座であることからKPI（Key Performance Indicator）を自覚しつつKGI（Key Goal Indicator）を確認したものの、単年度の開催に終わったためPDCAサイクルの手法の活用がかなわなかった。本プログラムは単発のワークショップであったため、KGIで考えることになったが、「楽しかった」「また来年も参加したい」という感想から判断し、一応の成果が認められる。ただ、これについても、残念ながら、次年度は展示との関わりが望めないという理由で静岡市美術館から継続不能との答えが返ってきたため、PDCAによる検証はできなくなった。美術館では当然ながら美術館の企画展が重要であり、多目的ホールの使用に制限がかかるのはやむを得ない。また関連イベントについても、企画展への入場者増に直結するような内容が求められていることだろう。今回話に出た写経などの講座も連携を図って実施する際には、十分に相談しながら進める必要がある。しかし学生に時間的余裕のない現状において、彼らの主体性を大事にしつつ先方との調整を図るための教員側のチェックは不可欠であり、一つのことを決定するにも幾度となく修正を加えて進めなければならないなど、改めて連携事業継続の困難さを実感した。

また、静岡大学の書道研究室が関係してきたこれまでの社会貢献活動を振り返ると、活用できる施設の確保が社会貢献活動の継続を危ぶみ中断させる結果を招いてきたのは明らかである。

今日では、大学もまた、企業と同様に「社会貢献活動＝フィランソロピー（Philanthropy）」が求められている。米国のインディアナ大学では、フィランソロピーに関する学部を創設してフィランソロピーにおける倫理や歴史、市民社会の形成などの科目の履修を用意し、卒業後には財団やヘルスケア、コミュニティ開発、教育や芸術などの様々な機会でのキャリアの機会を見込んでいるという。日本にはまだここまでの動きは見られないが、今後は大学が主体的かつ全面的に実施する形のフィランソロピーが重要になるのではないだろうか。特に「見返りのない」文化支援こそが理想の社会貢献であるといわれるほど、芸術文化の擁護・支援の推進が叫ばれる<sup>(10)</sup>現代においては、教育の高度化を重ね合わせ、長期継続的な視点で生涯教育を進めなければならない。フィランソロピーの分類には「本業を通じた社会貢献」、「金銭的寄付による社会貢献」、「施設を活用した社会貢献」、「人材を活用した社会貢献」が挙げられる<sup>(11)</sup>。今回の書き初めは「施設」を美術館に委ね「人材」の関わりを得ながら、大学の「本業」と「金銭」を軸に展開できた。

確かに連携によって学生の学びは大いに高まり貴重な経験となった。また、市民参加型「書き初め大会」の実現に絶対条件の会場確保についても解消できた。しかし、学生の予定をある程度に優先させるとなると、「連携」という形で外に出かけるのではなく、例えば社会貢献の場を大学内に用意し然るべき人材を招くことによって、学生の負担を軽減しつつ学生への教示は実現可能である。大学として社会貢献の目標を考えた場合、当然ながら連携する施設とは「ねらい」が微妙に異なる。その点においても大学が主体的に実施する形のフィランソロピーならば、自らの方向性をしっかりと定められるのではないだろうか。

幸い本プログラムで実施した書展の後に学生選抜展を開催させてもらった江尻交流学習館の館長からは、今後に向けての発展的な参加協力の話を受けており、来る江尻祭りでは、書文化専攻生によるパフォーマンスが計画されている。こうした自治体や各種団体とのネットワークを大切にしつつ一層強固にして、形を変える等の工夫をしながら、是非とも継続的に地域貢献の事業を展開し、積極的に地域住民との関わりを深めていきたいと考えている。

## おわりに

今回中心的に活動した2年生は書き初め当日や書展の会期中に成人式が行われるなど日程的に厳しかったが、学芸員の方の熱に心打たれ参加者の方に喜んでもらいたい一心で献身的に取り組んでいた。授業が終わってからの作業になるため、夜を徹して資料やパワーポイントを作成し、パフォーマンスの構成に励んだ。年末も正月も返上して関わり、書き初め大会の後も誠意を込め熱心に裏打ち作業を進めていた。参加者の方に書く楽しさを伝えたいという彼女たちの想いは確実に伝わったと考えている。

参加者の方々からの感謝の声が十分に彼女らを労ってくれたが、この場を借りて、書文化の学生の頑張りを紹介するとともに、学生達に感謝の言葉を送りたい。

なお、静岡市美術館の吉田様、青木様には、大変お世話になりました。改めてお礼申し上げます。

## 注

- (1) 杉崎哲子『「想いを伝える書き文字」－南部生涯学習センターとの共催講座『和の心 筆で書く年賀状』－』『静岡大学教育実践センター紀要 第20号』p.299～308 平成24年3月
- (2) 杉崎哲子「書き文字で伝える静岡の魅力－その1－」『文字文化と書写教育』平形精一編 萱原書房 第II部「書写書道教育」p.377～388 平成23年3月
- (3) 石井健「寺子屋の席書と書道パフォーマンス」『文字文化と書写教育』平形精一編 萱原書房 第I部「文字・書文化(含書論・書道史)」p.175～186 平成23年3月
- (4) 滝口雅弘・葛西孝章「生涯発達と書道学習の在り方－成人学習者の意識調査を通して－」『書写書道教育研究』第18号 全国大学書写書道教育学会編 p.31～40 平成16年3月
- (5) 杉崎哲子「小学校国語科書写におけるポートフォリオ評価法の可能性についての考察」『日本教育大学協会全国書道教育部門研究紀要』第11集 p.2～11 平成18年3月
- (6) 杉崎哲子「小学校国語科書写における『毛筆作品制作』に関する一考察」『書写書道教育研究』第21号 全国大学書写書道教育学会編 p.28～37 平成19年3月
- (7) 杉崎哲子「中学校国語科書写における発達段階に対応した硬筆指導の方向性に関する考察」『書写書道教育研究』第26号 全国大学書写書道教育学会編 p.50～59 平成24年3月
- (8) 岡崎友典、高島秀樹、夏秋英房『地域教育の創造と展開』放送大学教育振興会 平成20年
- (9) 中村哲『伝統や文化に関する教育の充実』教育開発研究所 平成21年
- (10) 出口正之『フィランソロピー企業と人の社会貢献』丸善ライブラリー 平成20年
- (11) 本間正明編『フィランソロピーの社会経済学』東洋経済新報社 平成20年